

銅剣の一箇所からの出土数としては最多であり、この遺跡の発見は日本古代史学・考古学界に大きな衝撃を与えた。これにより、実体の分からない神話の国という古代出雲のイメージは払拭された。その後の加茂岩倉遺跡の発見により、古代出雲の勢力を解明する重要な手がかりとしての重要性はさらに高まった。出土した青銅器の製作年代等については下記の通りであるが、これらが埋納された年代は現在のところ特定できていない。

出土した青銅器

銅剣

丘陵の斜面に作られた上下2段の加工段のうち下段に、刃を起こした状態で4列に並べられて埋められていた。358本の銅剣は、全て中細形c類と呼ばれるもので、長さ50cm前後、重さ500gあまりと大きさもほぼ同じである。弥生時代中期後半に製作されたとみられている。この形式の銅剣の分布状況から出雲で製作された可能性が高いが、鋳型が発見されていないため決定的ではない。いずれにしろ、形式が単一なので同一の地域で作られたことは確かである。また、このうち344本の茎には、鋳造後にタガネ状の工具でx印を刻まれている。このような印は、現在までのところこれらと加茂岩倉遺跡出土銅鐸でしか確認されておらず、両遺跡の関連性がうかがえる。

当時の大和朝廷が「イズモ」を特別な地域であると認識していた事が、記紀の記述にもあり、また神話のなかの三分の一を出雲神話で占める、といったことから証明される形となっている。更に、時代が下って編纂された「式内宮」として認められた神社の、出雲地方での総数と出土した銅剣の本数との奇妙な一致があげられる。

当初は、農道を造るために、神庭と呼ばれる場所であることから、とりあえず発掘調査をすることになり、最初に掘ったトレンチから銅剣が出てきた。担当者は連絡に奔走し、同時に発掘を進めていった。当初は百本位だろうと考えられたが、次々に出土し、最終的に358本という数に達した。それまでに全国で発掘された銅剣の総数を超える数の銅剣が発掘された事は当時のマスコミを興奮のるつぽに放り込んだ形となった。

これらの銅剣が発掘された1985年（昭和60年）7月13日の担当者の話では、梅雨のさなか、テントを張って毎日、夜も欠かさず見張りを続け、現場から帰ってきたその日の当直者は顔が変形するほど蚊にさされたというエピソードもある。

出来事

島根県立古代出雲歴史博物館に展示していた同遺跡の銅剣類のうちの1本について、展示台にぶつけて刃の中央に約4センチの亀裂が入っていることが判った[1] (<http://www.yomiuri.co.jp/national/culture/news/20080418-OYT1To0903.htm>)。

銅鐸

先年の騒動が静まってから、島根県教育委員会では、周辺に未発掘の遺物、遺跡がある可能性が大として、磁気探査器を使って調査したところ、銅剣出土地より南へ7メートルに反応があり、発掘が始められた。発掘開始まもなく、銅剣出土地点よりも7メートルほど谷奥へ行った場所で銅鐸6口が発見された。埋納坑中央に対して鈕を向かい合わせる形で2列に並べられていた。分類としては、最古の形式であるI式（菱環鈕式）が1つと、それよりやや新しいII式（外縁付鈕式）の形式のものが1個、外縁付鈕1式3個が出土している。製作時期は、弥生時代前期末から中期中頃の間と考えられている。文様に強い独自性がみられる1つを除いては、同形式の銅鐸の鋳型の分布からみて近畿産とする説が有力である。12年後に出土した加茂岩倉遺跡の39口の銅鐸との関連性を考慮すると、一概に畿内製造であるとは言い切れなくなっている。北部九州製の可能性が高い。三号銅鐸は伝徳島県出土銅鐸と同範であることが確認されている。二号銅鐸が京都市右京区梅ヶ畑遺跡出土の四号銅鐸と同範であることが判明した。なお6個の銅鐸の高さが20センチと同じである。

地元の研究者である速見保孝によると、近辺に銅鉱山があり、また鋳型を作るための材料となる「来待石（砂岩の一種、細かい細工がしやすく、勾玉などの製造に際して砥石として利用された）」が大量にある事から、出雲で原材料を集め、大量に製造したのではないかと、という説もある。更なる研究が待たれる。

成分

銅を主成分としスズと鉛を含む、青銅である。

スズは8.79～17.3%、平均で12.6%。鉛は1.53～7.53%、平均で4.3%含んでいることが分かった。銅とスズの合金である青銅は、スズの配合によって色が変化する。このような成分組織では、銅鐸の地金の色は少し黄色味を帯びた銅色（現在はサビで覆われている）を呈していたと考えられ、中には金色に近い色を呈していたものもあったのではないかとみられている。^[3]

銅矛

銅矛は銅鐸と同じ埋納坑の東側に、16本とも刃を起し、矛先が交互になるように揃えて寝かせた状態で埋められていた。横には小ぶりの銅鐸が鰭（ひれ）を立てて寝かせた状態で、同じく交互に並べた状態であった。鰭とは、銅鐸の横側、板状の部分を「鰭」と呼ぶ。古代当時、この青銅器に関わった人が、銅矛の刃と銅鐸の鰭を立てた状態で丁寧に並べて置いた、そのままの状態を保って出土したのである。^[4]

分類には諸説あるが、大まかに言えば、中広形14本と中細形2本に分けられる。製作時期は、銅剣とほぼ同じか、若干後の時期と考えられている。その形態や北部九州産の青銅器に見られる綾杉状のとき分けがあることから、16本とも北部九州で製作されたものとみられる。



矛先を揃えられ、銅鐸と共に出土した銅矛

脚注

1. [^] 平成10年6月30日文部省告示第110号
2. [^] よくある質問（荒神谷博物館サイト）（<http://www.kojindani.jp/faq/index.html>）
3. [^] 「金・銀・銅の日本史」 p23
4. [^] 「金・銀・銅の日本史」 p21-22

参考文献

- 『古代出雲と風土記世界』 瀧音能之 編（河出書房新社）
- 『古代の出雲辞典』 瀧音能之（新人物往来社）
- 『荒神谷遺跡』 三宅博士、田中義明（読売新聞社）
- 『金・銀・銅の日本史』 村上隆 2007年（岩波書店）

関連項目

- 中国地方の史跡一覧
- 弥生時代の遺跡一覧

外部リンク

- 荒神谷博物館 (<http://www.kojindani.jp/>)

- [出雲市ホームページ \(http://www.city.izumo.shimane.jp/\)](http://www.city.izumo.shimane.jp/)
 - [国宝・荒神谷遺跡 \(http://www.highlight.jp/kougindani/index.html\)](http://www.highlight.jp/kougindani/index.html)
 - [国指定文化財等データベース \(http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.asp\)](http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.asp)
 - [島根県遺跡データベース \(https://iseki.shimane-u.ac.jp/search_detail.php?id=6400&page=1&search_kbn=site&act=&sitename=%E8%8D%92%E7%A5%9E%E8%B0%B7%E9%81%BA%E8%B7%A1&sitekana=&target=site\)](https://iseki.shimane-u.ac.jp/search_detail.php?id=6400&page=1&search_kbn=site&act=&sitename=%E8%8D%92%E7%A5%9E%E8%B0%B7%E9%81%BA%E8%B7%A1&sitekana=&target=site)
-

「<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=荒神谷遺跡&oldid=82066090>」から取得

最終更新 2021年2月28日 (日) 11:56（日時は個人設定で未設定ならばUTC）。

テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。